

# J A 自己改革推進レポート（J A 鳥取中央） 9月号

## 1. 農畜産物引換券、200食のカレーに

J A 鳥取中央は7月20日、ほくほくプラザ（北栄人権文化センター）へ農畜産物引換券を進呈した。

この引換券は、7月29日に予定していた地域の子どもたちが人権学習や夏休みの宿題に取り組み、食事を楽しむイベント「ほくほく食堂」の食材調達に使われる予定だった。しかし、コロナ感染拡大に伴い開催が中止となったことから、食材を無駄にしないため、8月11日、シダックスグループが運営する同町の放課後児童クラブ「北条なかよし学級」と「大栄こども学級」へ、合計200食のカレーとなって届けられた。子ども達からは、「普段はお弁当だから楽しみにしていた。カレーのウインナーがおいしかった」と好評だった。



## 2. 持続可能な開発目標（SDGs）と食品ロスなどについて学ぶ 農業生産者と消費者が交流

J A 鳥取中央は7月29日、本所にて農業生産者と消費者の交流会を初めて開いた。

同 J A 女性会会員や農業生産者、消費者団体会員、J A 関係者約40人が参加し、グループワークを通じて、食品ロスなどの持続可能な開発目標（SDGs）について知識を深めた。

生産者の中原さんは、「野菜を出荷する際、少しでもキズや虫食いがあると、消費者の購買意欲が下がり、売れ残りが発生し破棄している」と現状を紹介した。

同 J A 生活部の中林部長は、「J A は、SDGs の達成に貢献できるよう総合事業に取り組んでいる。今後も継続的な交流を通じて、利用者や地域の方に農業や健康について理解を深めてもらえるような活動を積極的に取り組む」と意気込みを話した。



### 3. JA中央営農センターが「秋冬ブロッコリー定植指導会」を実施

三朝町とJA中央営農センターは8月25日、三朝町では初となる「秋冬ブロッコリーの定植指導会」を行い、新規ブロッコリー生産者、行政、JA関係者約20人が参加した。

定植指導会は地域の気候を考慮した栽培方法や品種の選定などかねた実証実験として行われ、今後の栽培指導はJAと普及所職員が担当する。中央営農センターの営農指導員が定植機の使用方法や作業の際の注意点を説明したあと、新規生産者がブロッコリーの苗を定植した。



12月の収穫を予定している。

参加者は「これからもっと生産者が増え、ブロッコリーが三朝町の新たな特産品になるよう頑張りたい」と話した。三朝町では特産物振興加速化プロジェクトの一環として新規作物への取り組みを支援しており、三朝町の新たな特産品とするべく、今年度は6人の生産者が計48.4アールの面積でブロッコリーの栽培に取り組む。なお、湯梨浜町においても同計画が進められている。

以上